長野市立博物館 Nagano City Museum

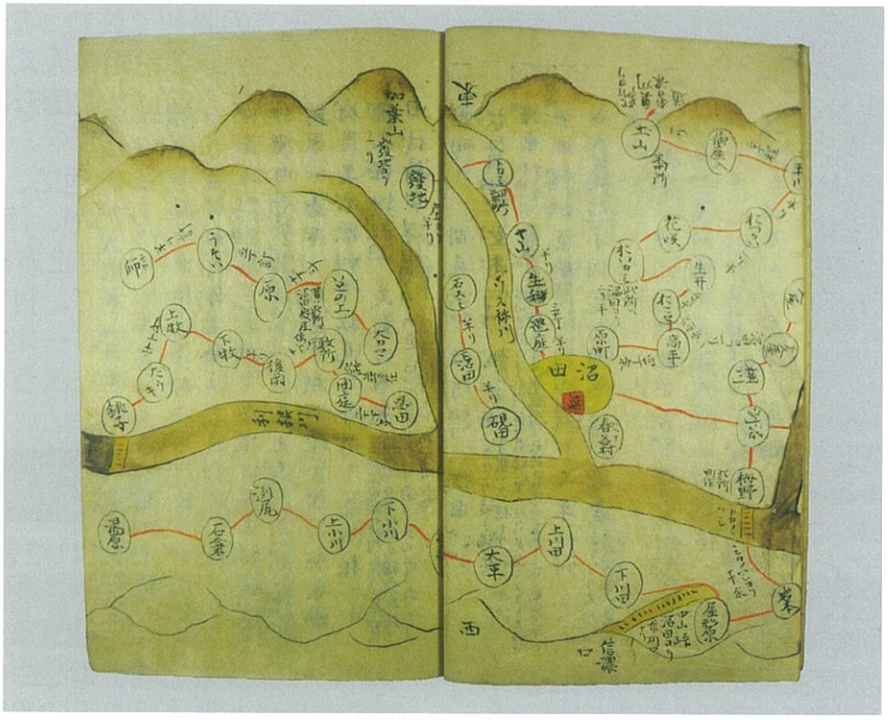
# 博物館だより

第99号

購入資料

# 真武内伝

## 「川中島の戦い」と真田・村上氏



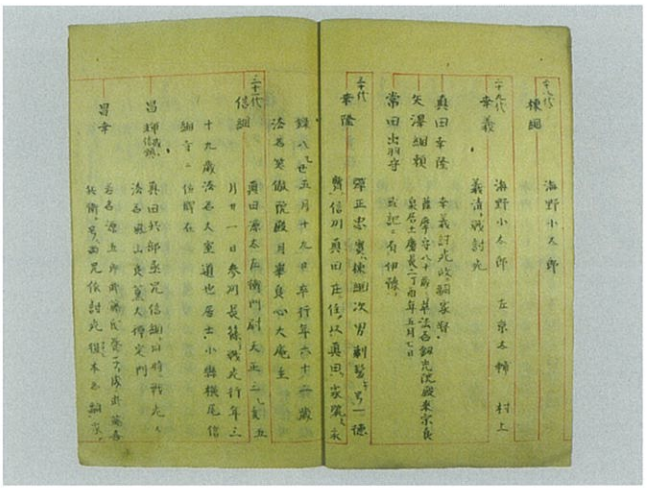
■『真武内伝』より　上野沼田周辺を描く。天正8年(1580)真田昌幸が奪取した。

戦国時代、信濃は各地に中小の豪族がそれぞれに勢力を持ちつづけ、一国を束ねる程の力を持つ武将はあらわれませんでした。そのような中、天文年間（1532～1555)、甲斐国を制した武田氏が信濃への侵攻をはじめました。徐々に信濃国内で勢力を広げていった武田氏は、後に越後の上杉氏と武力衝突を繰り返していきます。これが「川中島の戦い」とよばれる戦いです。

その間、信濃の武将たちは、武田・上杉の巨大な勢力の渦に巻き込まれるように、それまでのあり方から大きな変化を強いられていきました。この中には、小県の真田氏や村上氏も含まれます。

ここでは、昨年館蔵資料に受け入れた『真武内伝』について紹介しながら、「川中島の戦い」前後の時期の真田氏や村上氏の描かれ方についても触れていきたいと思います。

『真武内伝』は松代藩士の竹内軌定によって、江戸時代前半の享保16年（1731）にまとめられた書物です。戦国時代から江戸時代はじめにかけての、幸隆（幸綱）・昌幸・信之・幸村（信繁）を中心とした真田家の系譜や出来事が記されています。本編5巻に附録5巻の合計10巻からなります。次に書かれている内容についてみていきます。



■『真武内伝』より　真田家系図の一部分。
海野棟綱から真田昌幸までを記す。

## 『真武内伝』にみる真田と村上

『真武内伝』には、おおまかには次のようにあります。

天文年中、海野棟綱の長男・幸義は、村上義清と信州小県で合戦し討ち死にしました。弟の真田幸隆は上野国箕輪城主・長野信濃守を頼り落ち延びて行きます。長野氏の下での処遇を無念に感じていたところ、甲州武田氏に迎え入れられ、武田家の配下に入ります。天文15年（1546）幸隆は智略をもって村上勢を真田の居城へ引き入れて包囲し、村上方の精鋭500人を一人も残さず討ち取る武功をあげました。

優秀な家臣をことごとく失った村上義清は大いに怒り、翌天文16年8月24日、信州上田原で武田方と合戦を繰り広げました。この戦いは武田方の大勝利に終わり、村上義清は上杉氏を頼り越後へと逃げて行きました。そして同年10月19日、信州海野平にて晴信（武田信玄）と越後の景虎（上杉謙信）による合戦がおこりました。

このように、村上氏と真田氏の争いを中心に描きながら、川中島の戦いへ向かっていく様子が記されています。

## 史実との違い

しかし、『真武内伝』に記された内容は、今日からみると多くの誤りが含まれていることがわかります。

まず、天文15年に真田幸隆が村上義清方の家臣500名を討ち取ったという出来事を裏付ける資料は、今日見出すことはできません。

また、上田原での合戦は天文16年に起こり、武田方の勝利で終わったとありますが、実際には上田原の合戦は天文17年に起こり、信玄が負傷するなど、武田方にとっては負け戦でした。

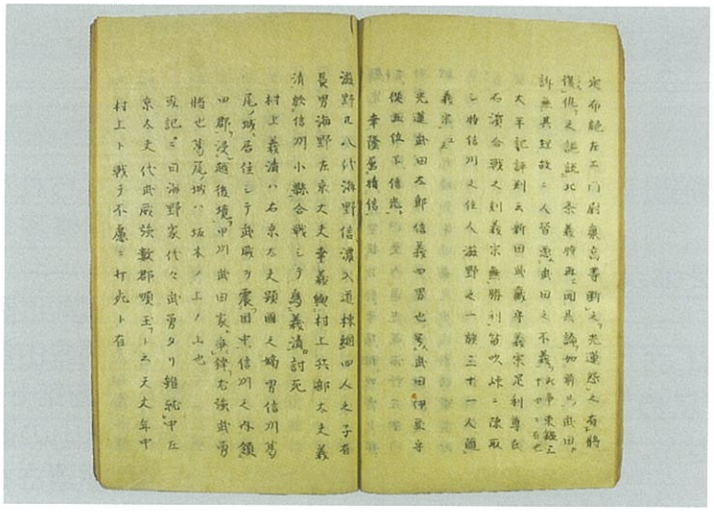
この上田原の戦いの他に、『真武内伝』には記述されていませんが、「戸石崩れ」とも呼ばれる天文19年の村上方拠点・戸石城での武田方の大敗を加えて、村上義清は信玄を二度も破ったのでした。一体なぜ『真武内伝』では、これまでみてきたような書かれ方をしているのでしょう。

## 『甲陽軍鑑』の存在

江戸時代に多く読まれた書物のひとつに『甲陽軍鑑』があります。武田信玄を中心に、業績や兵法、武士の心構えを記したもので、江戸時代はじめ、武田家旧臣の子・小幡景憲がまとめたと考えられています。

徳川幕府を開いた人物といえば、死後に神様となった徳川家康ですが、その家康を三方原の戦いで完膚なきまでに破ったのが武田信玄でした。すなわち、信玄は神をも破った武将として、その兵法を記したとされる『甲陽軍鑑』は武士をはじめ多くの人々が読むところとなったのでした。

そのような『甲陽軍鑑』の中に、上田原の合戦を記した箇所がありますが、そこには天文16年の出来事として「信州上田原へ出、八月廿四日辰の刻に、甲州方より合戦を始むる」と記されています。天文16年8月24日。『真武内伝』に記された日付と一致します。このことから、『真武内伝』の内容は『甲陽軍鑑』から強い影響を受けていることがわかります。



■『真武内伝』より　天文年間、村上氏と真田氏の戦いを描く。

■『川中島合戦記』より　謙信を頼って越後へ落ち延びた義清を描く。

## 『甲陽軍鑑』の影響力

『甲陽軍鑑』に影響を受けたものは『真武内伝』だけではありません。江戸時代以降著されてきた、川中島の戦いに関する書物のほとんどが、その影響を受けているといえるでしょう。例えば、館蔵資料のうち、安政6年（1859）に出版された読み本「川中島合戦記」の中でも義清は天文16年8月24日、上田原にて敗れ、越後に落ち延びたとあります。

## おわりに

武田氏による信濃侵攻から、川中島の戦いを経て、信濃の武将たちはそれぞれのあり方について、大きな変化を遂げました。地方の一豪族であった真田氏は武田家家臣に取り立てられると家内で頭角を現していき、武田家滅亡の後は遂に大名の身分にまで上り詰めていきました。一方、信濃国において守護と並ぶほどの力を持っていた村上氏は、武田氏の侵攻を防ぎきれず越後へと移り、義清は越後根知城で客死したといわれます。

江戸時代を迎えた後、『甲陽軍鑑』やそれに影響を受けた書物を通して、人々は川中島の戦いについて触れました。そこには、史実とはいささか異なる様子が描かれていましたが、川中島の戦いを引き起こした遠因として、真田・村上の両氏の姿が描かれていたのでした。

（宮澤崇士）

# 購入資料　京師騒動記

## 1.概要

博物館では、２０１５年度に『京師騒動記』（仮題）を購入しました。

表題はなく、横丁で５３丁。タテ１２㎝、ヨコ１６.５㎝です。

ところどころに追記があるので、筆写したものであることがわかります。ただし、この原本については、現在のところわかりません。

## 2.内容

記載の時期は、文久２年（1862）７月２０日の島田左兵衛のものからはじまり、文久３年７月２１日の佐久間修理（象山）までの１年間です。項目は表として掲げましたので参照願います。読み方にもよりますが、４８項目が取り上げられています。

本書は豊富な絵が挿入されていることが特徴です。ただし、そのほとんどが討ち取られた首で、京都でさらされたものです。加えて、拷札と記される、罪状を記したものも写されています。討ち取られた首、もしくは遺体の挿絵は２０カットあります。生々しい描き方で、目をそむけたくなる場面もあります。

## 3.佐久間象山について

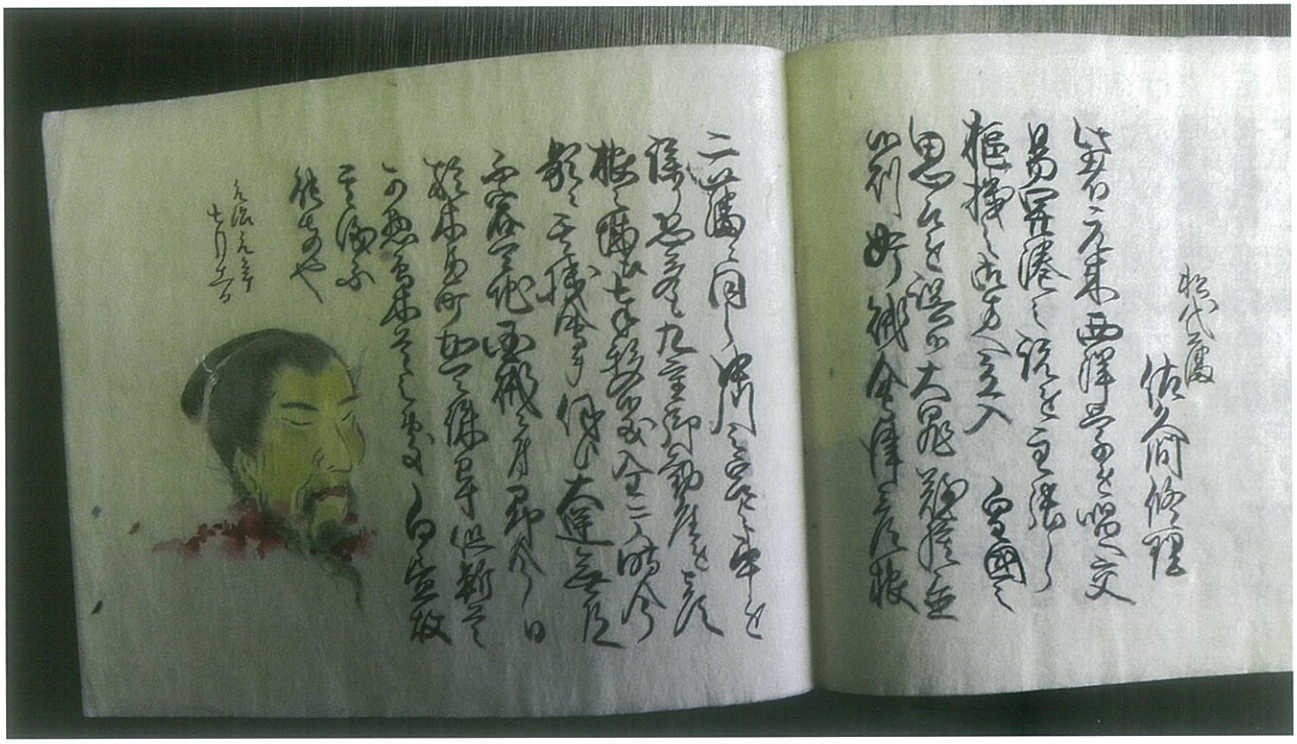
本書は佐久間象山の首で締めくくられています。拷札には、「松代藩　佐久間修理」とあり、その罪状を記しています。

佐久間象山の最後については、以前に論じたことがありますが（拙稿「佐久間象山像の成立をめぐって」『信濃』第６０巻第８号、2008年）、このなかで、佐久間象山の遺体や遺品は、当時松代藩から京都に派遣されていた、北澤正誠が妙心寺に墓を築き、遺品については神戸にいた勝海舟のもとに送っています。

さて、本書によって新たに得られた知見としては、佐久間象山は首を取られ、拷札とともに、京都のまちで公衆の面前にあったということです。

この拷札とされるものが、現在、真田宝物館に伝わります（『真田宝物館収蔵品目録　近山家旧蔵　佐久間象山関係資料』）。「斬奸状」と題されたものですが、内容が一致します。

「斬奸状」は、首とともに京都三条大橋にかかげられたものと思われます。掲げられた翌日、上洛していた松代藩士・三沢刑部丞らが密かにはぎ取って持ち帰ったと説明されています。



| 年月日 | 処刑された人物名、もしくは文書の内容 | 絵の有無 | 拷札（貼紙）の写 有無 |
|---|---|---|---|
| 文久２年７月20日の夜 | 島田左兵衛 | 有 | 有 |
| 同年閏８月21日 | 本間精一郎 | 有 | 有 |
| 同閏８月23日 | 宇郷玄番 | 有 | 有 |
| 閏８月晦日 | 目明文吉 | 有 | 有 |
| 同年９月朔日 | 町人体の者 | 有 | 無 |
| 同年９月24日 | 渡部金三郎　森孫六　大河原十蔵 | 有 | 有 |
| 同24日 | 京都御奉行所江御届書<br>東海道石部駅年寄　久兵衛 | 無 | 無 |
| 同25日 | 小寺忠蔵　自害 | 無 | 無 |
| 同10月22日 | 三条大橋に懸けられた木札の文字 | 有 | |
| 同10月10日 | 寿三郎　半兵衛 | 有 | 有 |
| 同11月15日 | 村山かずき | 有 | 有 |
| 同月16日 | 多田帯刀 | 有 | 有 |
| 同年12月 | 源尾式部 | 無、 | 無 |
| 文久３年正月 | 宇和島老職幽閉を許されたことについて | 有 | 無 |
| 同年正月14日 | 池内大学 | 有 | 有 |
| 同年正月29日 | 千種家家来の加川政年の手<br>右の手は千種殿御玄関に置かれた<br>左の手は岩倉殿御玄関におかれた | 有 | 有 |
| | 献毒之事 | | |
| 同年２月２日 | 京町奉行から千種家への達書 | | |
| 同年２月８日 | 土佐藩屋敷の橋に届けられた山城国葛野郡 | | |
| 広橋村庄屋　惣助 | 有 | 有 | |
| 同年２月８日 | 伊勢屋治兵衛 | 無 | 無 |
| 同年２月22日 | 足利尊氏　足利義詮　足利義満の木像の首 | 有 | 有 |
| 同年２月 | 山田省三郎　自害 | 有 | 有 |
| 同年２月晦日 | 足利将軍木像の首を抜き取ったことについて | 無 | 無 |
| 同年２月27日 | ２月18日イギリス軍艦横浜入港につき | | |
| 生麦事件について | 無 | 無 | |
| 同年同月中旬 | 長州藩士切腹 | 無 | 無 |
| 同夜 | 五十歳余の武士（水戸藩）殺害 | 無 | 無 |
| 同夜 | 武士を殺害した武士（水戸藩）　切腹 | 無 | 無 |
| 同月中旬 | 二人心中 | 無 | 無 |
| 同月中旬 | 高瀬川に男の首 | 無 | 無 |
| 同月下旬 | 大日山にて切腹 | 無 | 無 |
| 同月17日 | 友吉方士人四．五人召し取る | 無 | 無 |
| 同月21日 | 正惇　光惇　（斬首の僧） | 無 | 無 |
| 同年２月19日 | 英夷の書翰 | 無 | 無 |
| 同４月 | 両国橋に　神戸六郎　岡田周蔵 | 有 | 有 |
| 文久３年５月20日 | 家里真太郎 | 有 | 有 |
| 同年６月５日 | 下関からの書翰写<br>フランス軍艦との戦争の状況 | 有（玉の絵） | 無 |
| 同年６月２日 | 壬生浪人が湊部屋力士を襲った | 無 | 無 |
| 同年６月25日 | 天奏について江戸表からの御書写 | 無 | 無 |
| 同年７月12日 | 薩摩藩の功績について（薩英戦争） | 無 | 無 |
| 同年７月11日 | 守田道意 | 無 | 無 |
| 同年７月15日 | 寺町弁財天前の貼紙 | 無 | 無 |
| 同年７月21日 | 渋賀右馬大允 | 無 | 無 |
| 同年７月24日 | 八幡屋宇兵衛 | 有 | 有 |
| | 丁子屋修三郎　　布屋彦太郎　同父市次郎<br>八幡屋卯兵衛　大和屋庄兵衛 | 無 | 無 |
| 同年７月 | 大藤幽叟 | 有 | 有 |
| | 不明死体 | | |
| 同年８月３日 | 安場大次郎 | 有 | 有 |
| 同年７月21日 | 佐久間修理 | 有 | 有 |

## ４．佐久間象山の考え方

本書の佐久間象山の拷札と「斬奸状」が一致することで、この内容の正確さが証明されます。そして、佐久間象山が殺害された理由が明確になります。

①西洋学を唱え交易開港の説を主張した。

②会津藩・彦根藩とともに、朝廷を動かして彦根への遷都を企てた。

開港論、彦根遷都論によって暗殺されたと結論付けられるでしょう。

## ５．本書の特徴

本書は、京都において討ち取られた人物を中心に挿図を交えて構成されています。ただ、この時期に起こった、生麦事件や薩英戦争、下関における長州とフランスとの戦争についても触れています。生麦事件については、細かい記載が見られ、殺害されたイギリス人の遺族に対する「養育料」を求める記載もあります。文久２．３年の国内における情勢がコンパクトにまとめられていると、その性格をまとめることができます。

（原田和彦）

# 新収蔵資料紹介　～三峰講道具～

## はじめに

博物館ではさまざまな資料を収蔵しています。そのなかには地域の信仰の様子をものがたる庚申講や念仏講といった講の道具などもいくつか収蔵しています。

ここではそのなかで、新たに寄贈された三峰講の講道具を紹介します。

## 三峰講とは

三峰講は埼玉県秩父市にある三峰神社を信仰し、年に一度講の代表が秩父にお参りに行き、他の講員のお札などを貰って帰る代参講のことです。

イザナギノミコトとイザナミノミコトを祀る三峰神社ですが、人々の信仰の対象は神社の眷属である山犬（狼）でした。時によっては人をも襲うほどの狼の力強さを期待して、神社にお参りに来た講の代表は講員用のお札のほか、眷属の山犬（実際は御眷属と記されたお札）を一年間借り受け、地域の守り神としてお祀りをします。そして一年が過ぎると地域を守ってくれた御眷属を神社に返し、新たな御眷属を借りにお参りに行きました。

## 三峰講道具

寄贈を受けた資料は松代町東寺尾で行われていた三峰講の道具箱です。蓋の表に「三峯山帳面箱」、裏に「慶応元年乙丑年　東寺尾村講中」と記され、箱の中には講の活動を記録した複数の帳面が残されていました。その記録を見ると講は元治２年（慶応元年）(1865) に結成され、平成 11 年 (1999) までの百数十年間続けられていたことがわかります(写真１)。

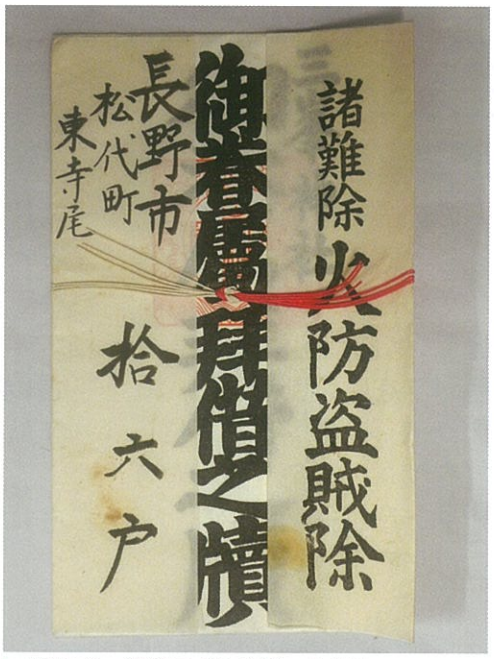
## 講の結成

「元治二年　三峯山講中」と表題のある帳面にははじめに講の結成の経緯について記されています。それによると三峯山を信仰する者 29 名が２月 16 日に講を発足し、三峯山から御眷属を借り受け、村の秋葉山の社地へ勧請したことがわかります。

勧請に際しては三峯山から借り受ける御眷属の拝借料の他、「御犬御扶持料」として六百四十八文とあります。実際の御眷属は紙でできたお札ですが、これを本物の山犬として扱っていることがわかります。

帳面にはまた、三峯山から出された御眷属を一年間借り受ける際に守らなければならな

■ 写真１　開講の年に作られた帳面




■ 写真２　御眷属（お犬様）のお札

いことを記した御眷属拝借指南の写しも記されており、三峯講を始めるにあたっての講員の熱意が感じられるものとなっています。

ところで東寺尾の三峯講は、どのような理由から結成されたのでしょうか。残念ながら明確にその理由が記された記録は残されていません。

三峯信仰は一般に火防・盗難除け・害獣除けなどの利益を期待して信仰されます。しかし、東寺尾で講が結成された元治２年頃は、全国的にコレラが流行した時期であり、コレラ退治の利益を期待し、急速に三峯山の信仰が広がった時期にあたります。

## 講の活動

開講当初は 29 名が参加し、毎月 19 日に講を開きながら、年に一度講員の中から２名づつ三峯山への代参者を出していたようですが、数年後には講の集まりは正月のお日待ちと五月の代参者下向、秋の三峯社のお祭り（燈籠張り）の年三回に減っています。ただし三峯山への代参は平成 11 年まで途絶えることなく続けられたようです。

明治 10 年代のピーク時には 30 名を超える人数がいましたが、平成に入ると休会あるいは退会する講員が増え、平成８年には当初の講員の半分を割り込むようになりました。そして平成 11 年の代参を最後に講を閉じ、その道具は地元の氏神社に納められましたが、その後当館へ寄贈されました。

講道具箱の一番底には最後の代参のときに貰い受けたと思われる御眷属が残されていました（写真２）。

## 博物館に収蔵されているそのほかの講道具

東寺尾の三峯講のように閉講した講の道具が博物館にはいくつか収蔵されています。

それらは地域の葬儀の扶助組織として機能していた庚申講をはじめ、念仏講やお寄り講（報恩講）、瓦職人の組合的な性格を持っていた太子講などの講道具です。

博物館ではこれらの収蔵資料を紹介する企画展を今年度の冬（平成 29 年１月 14 日～３月５日）に開催する予定でいます。

ここではそのなかのいくつかの資料を紹介します。

■ 写真３　平林の庚申講道具

【豊栄平林の庚申講道具】

庚申講とは 60 日に一度まわってくる庚申（かのえさる）の日に講員が当番宿に集まり、庚申の本尊である青面金剛（しょうめんこんごう）の掛軸をかけて長寿や五穀豊穣を願ってお祀りをする行事です。平林ではこのほか庚申講が葬儀の際の扶助組織としても機能していました。平林に限らず、長野県内では庚申講が葬儀の際の手伝いをするというところが多かったようです（写真３）。

【太子講道具】

聖徳太子を祀る太子講は、建築に関わる職人仲間の講として結成されることが多いです。写真の太子講道具は昭和 30 年代、まだ長野市内に瓦を製造する瓦屋が何軒かあった頃に、それらの瓦屋によって祀られていたものです。

年に一度春先に講を開き、太子を祀りながら、それぞれの瓦屋が抱えていた瓦職人の給金を決めるなど、職人組合的な性格を持っていました（写真４）。

■ 写真４　瓦屋の太子講道具

■ 写真５　六地蔵町伊勢講の下降式

## 現在も行われている講行事

これまで紹介してきた講は、いずれも現在は行われなくなってしまったものです。実際○○講と呼ばれる集まりや行事は、いまやほとんど見られなくなりました。しかしそのなかにも、現在も継続して行われている講が存在します。

長沼の六地蔵町の伊勢講もそのひとつで、毎年２月に３人の代参者をたてて、伊勢神宮にお参りしお札を貰ってきます。この伊勢講では下向した代参者を迎える際、他の講員が代参者を迎える仮宮をヨシを用いて作ります。下向した代参者はこの仮宮に坐り、お神酒を受けた後、後ろ向きのまま仮宮の裏から退出します。その後すぐに仮宮は燃やされます。これで代参者に付き添っていた神様が仮宮にとどまり、燃やされて出た煙にのって伊勢まで戻るといわれています。

十数年前までは同じ長沼地区内の複数の町に伊勢講があって、下降式と呼ばれる同じような行事を行っていましたが、現在では六地蔵町だけがその行事を残しています（写真５）。

## 最後に

東寺尾の三峰講道具の紹介から始まり、この冬の企画展について簡単に紹介しました。展示では、先ほど紹介した講道具を含めた収蔵資料に加えて、六地蔵町のような現在も続けられている講行事について紹介する予定です。講道具からわかるかつて行われていた講の様子や、現在も行われている講の様子を通して、地域と講の関係について考えてみたいと思います。　　（細井雄次郎）

**博物館だより　第99号**
**発行日2016年9月30日**

**長野市立博物館**
〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL：026(284)9011
http://www.city.nagano.nagano.jp/museum

**戸隠地質化石博物館**
〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

**鬼無里ふるさと資料館**
〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

**信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館**
〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

**ミュゼ蔵**
〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500